



やうみ よいち  
八海宵一

未来版罪と罰

SF  
短編

囚人24 - 356は、激痛で目を覚ました。

強烈な電撃が背中に走り、思わず身をのけぞらせると不意に電撃は右腿に転移した。

「いい加減にやめてくれ！」

囚人24 - 356は壁に埋めこまれたカメラにむかって叫んだが、電撃はおさまらず、それどころか左腕や鼻にも激痛が襲ってきた。

「頼む、頼むから、もうやめてくれ！」

だが、その願いは聞き入れられなかった。電撃はいろいろな部分にあらわれ、囚人を苦しめた。それは五分ほど続き、そして嘘のようにおさまった。

囚人は脂汗をうかべながら、壁に埋めこまれた時計に目をやった。

時計は深夜二時を表示していた。

ランダム電撃刑五年。

それが囚人に課せられた刑罰だった。

日に三度、体に埋めこまれた電極に電気が流れるという文字通りの刑罰だった。決まった時間に流れるのなら、ある程度痛みに耐えることもできたが、ランダムではそうもいかない。囚人は電撃におびえる毎日を過ごすしかなかった。

毎日、三度目の電撃がやってくるまで、心休まる時間はない。

そして、今日はその一撃目が午前二時に来たという訳だ。

囚人24 - 356は、入所してわずか一週間で悲鳴をあげた。

「こんなのはおかしい！ 人権を無視した刑だ！」

『ソナナコトハ、アリマセン』

天井のスピーカーから機械的な声が聞こえてきた。この刑務所を管理しているコンピュータの声だった。この刑務所は完全オートメーション化されていて、囚人以外の人間はいなかった。

『当施設ハ人権ニ配慮シ、健全ニ運営サレテイマス』

「健全に運営だと？ ふざけるな！ 動物実験みたいに電極を埋められておびえる日々のどこに配慮があるっていうんだ！」

『ソレハ刑罰デスカラ、仕方アリマセン。ソノ苦シミト、ムキアウ時間コソガ、大切ナノデス』

「不当だ！ この刑罰は不当だ！」

囚人は力の限り主張した。狭い独房に声が響き渡った。

しばらくして、コンピュータが確認するようにたずねてきた。

『刑罰ニ不満ガオアリデスカ？』

「当たり前だ！」

『デハ刑ヲ変更シマスカ？』

「なんだって？」

囚人の声が思わず裏返った。

「そんなことができるのか？」

『ハイ』

コンピュータは当然のように即答した。

『同程度ノ刑ヲ選択スルナラバ、変更ハ可能デス』

囚人はその回答に胸躍らせた。この電撃地獄から解放されるとは思ってもいなかった。なんて配慮の行き届いた刑務所だ。利用しない手はない。

だから囚人はいった。

「じゃあ、電撃なしの懲役刑にしてくれ」

『アナタノ場合、通常ノ懲役刑デハ、対応デキマセン。追加刑ヲ申シ出テクダサイ』

「追加刑ってなんだ？」

『タトエバ、懲役刑ト合ワセテ、生爪ハガシノ刑ヲ選択スルト、刑期ハ三年ニナリマス』

「生爪をはがすだって!? 冗談じゃない、拷問じゃないか！」

『デハ断食二か月ノ刑』

「それじゃ死んじゃうだろ！」

『臓器ノ提供ハイカガデショウ？ 肺、心臓、胃、肝臓ノ提供デ懲役一年ニナリマスガ』

「……もっと、穏やかな刑はないのか？」

囚人はいい加減うんざりしてきた。電撃刑よりも嫌なものばかりじゃないか。

不服そうにしていると、コンピュータがやってきた。

『ナイコトハナイデスガ……アナタニハ、ムカナイト思イマス』

「なんだそりゃ。いいからいってみろ」

囚人がうながすと、コンピュータは静かにいった。

『自分ノ罪トムキアウ刑デス』

「なんだそりゃ？」

『アナタガシテキタコトヲ、アナタ自身ガ再確認スル刑デス』

「具体的になにをやるんだ？」

『アナタノ罪ニ関スル映像ヤ音声、新聞記事等ヲヒタスラ閲覧スル作業ガ課セラレマス』

「つまりニュースや新聞記事なんかを読んで、反省しろってことか？」

『オオムネ、ソウデス』

囚人はその刑の内容を聞き、いかにも楽そうだと、顔を輝かせ、すぐに刑の変更手続きを行った。刑の変更はすぐに受理され、そして執行された。

壁面ディスプレイにニュース映像が流れた。ニュース記事が表示される。被害者遺族の生の声が部屋中に響き、自分の家族がいまどのような生活をしているのか（逃亡者生活のような悲惨な状況）が、永遠と流れた。

映像を見続けた囚人は、わずか一週間で老人のようにふけこんだ。黒かった毛髪は真っ白になり、目はひどく落ちくぼんでいた。まるで別人のように変わり果てていた。

そして――

『囚人24 - 356。アナタノ刑期ハ満了シマシタ。出所シテクダサイ』

「はい……」

己の罪を深く反省した結果、刑期は早まり、わずか二週間で出所することができた。

そして出所した元囚人 24 - 356 は、その二時間後、罪の意識から自殺した。

## 未来版罪と罰

<http://p.booklog.jp/book/65405>

著者：八海宵一

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yaumiyoiti/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/65405>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/65405>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ